

新産地報告 (8)

上野 勝典*・上野 由貴枝*

New localities of some plants in Nagano Prefecture (8)

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

コミヤマスマレ (スミレ科)

Viola maximovicziana 写真1

・根羽村 檜原 900 m 2012 年 5 月 20 日
NAC163746

細い流れのあるスギ林下のやや日当たりの良い場所に、小さなコミヤマスマレの群落があり、20～30 株程度が生育していた。以前から葉があるのに気がついてはいたが、花期がスミレの中でも非常に遅いことから、なかなか花を見ることができなかった。コミヤマスマレはスミレの中でも薄暗いところに生育し、長めの狭い心形の葉に毛が密生しており、スミレらしくない。顎が反り返るという特徴がある。標本の記録は大桑村と天龍村(長野県 2005)のみであったが、「信州のスミレ」(今井・伊東 2004)には阿南町、大桑村、根羽村に分布すると記載されている。主に太平洋側の関東以西に分布する日本固有のスミレである(加藤・海老原 2011)。

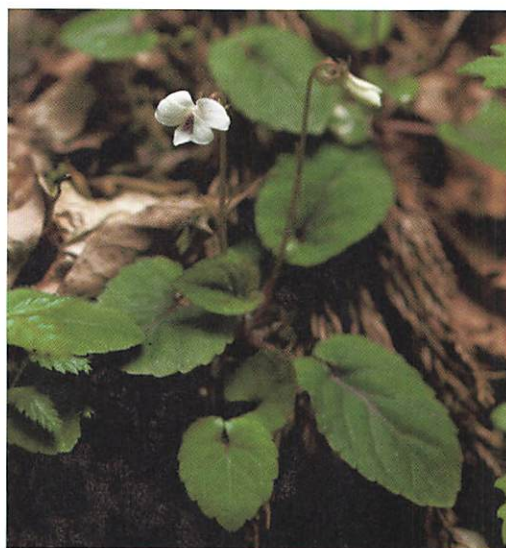


写真1 コミヤマスマレ 根羽村檜原
2012 年 5 月 20 日

ミヤマセントウソウ (セリ科)

Chamaele decumbens var. *japonica* 写真2

・天龍村 早木戸川 500 m 2012 年 4 月 1 日
NAC163749

溪流脇の水に浸りそうな岩に、付着するように葉の非常に細いセントウソウが咲いているのに気がついた。「日本の野生植物Ⅱ」(佐竹他 1982)では、葉が特に細い型をミヤマセントウソウとし、セントウソウの変種として扱っている。また「日本の固有植物」(加藤・海老原 2011)ではセントウソウ属は日本固有の単型属で、4 変種からなるとし、その中にミヤマセントウソウを含めている。本種は愛知県から西日本から四国、九州の山地に分布するとされ、近くの愛知県側にも生育しているようである。「高知県植物誌」(高知県 2009)では、標高 500～1300 m に分布しているとされている。また、「神奈川県植物誌」(神奈川県植物調査会 2001)においては、過去に記録された標本を検討した結果、ミヤマセントウソウとされるものは神奈川県には分布していないと結論づけている。一方、「長野県植物誌」(清水 1997)では、八ヶ岳と南アルプスの標高 2000 m 以上の高山帯に記録されており、生育環境と分布域に大きな違いがある。長野県で過去に記録されているものは「日本の野生植物Ⅱ」のミヤマ



写真2 ミヤマセントウソウ 天龍村
早木戸川 2012 年 4 月 1 日



写真3 カリガネソウ 伊那市長谷戸台
2012年8月15日



写真4 ホクリクネコノメ 木曾町開田高原
末川 2012年5月5日



写真5 イナヒロハテンナンショウ
辰野町 2012年6月2日



写真6 ヤマトテンナンショウ
塩尻市旧塩尻 2012年7月7日



写真7 エビネ 天龍村 2012年5月20日



写真8 ヤマトキソウ 松本市大野川
2012年7月28日

セントウソウと同じものか検討を要する。

カリガネソウ (クマツヅラ科)

Caryopteris divaricata 写真 3

・伊那市長谷戸台 1000 m 2012 年 8 月 15 日
NAC163750

日当たりの良い、石のゴロゴロしたガレ地の斜面にカリガネソウが数株花をつけていた。周囲は石灰岩が多い。長野県ではほぼ全県に分布しているが、南アルプス周辺での記録は無かった(長野県 2002)。葉を触ると悪臭がするが、花の形が独特で美しい。

ホクリクネコノメ (ユキノシタ科)

Chrysosplenium fauriei 写真 4

・木曽町開田高原末川 1200 m 2012 年 5 月 5 日
NAC163744

末川の護岸を中心に広くホクリクネコノメが生育しているのに気がついた。ホクリクネコノメの特徴は、根生葉は円形でほとんど柄がなく、暗紅色の葯が顎裂片から飛び出て、顎が直立する。長野県では北部にのみ記録があり(長野県 2002)、日本海側の多雪地帯に分布する日本固有の植物である(加藤・海老原 2011)。包葉がやや鮮やかで小さめであることから、北部で見られる典型的なホクリクネコノメとは見た感じがかなり違うように思った。種子の表面を見ると、ホクリクネコノメの特徴である乳頭状突起が観察された。隣接した川では、ニッコウネコノメばかりでホクリクネコノメの見られない場所、また逆にホクリクネコノメばかりでニッコウネコノメの見られない場所があり、両者の混生する場所は見られなかった。

ヤマジオウ (シソ科)

Lamium humile

・阿南町新野 900 m 2012 年 9 月 21 日
NAC163747

スギ林下の細い流れのある湿った場所に多く群生していた。花はすでに終わっていた。花茎は伸びず、葉の上に乗るように変わった咲き方をする。近くでは天龍村で観察したことがある。長野県では飯田市と天龍村に記録があり(長野県 2002)、神奈川県以西の太平洋側に分布する日本固有の植物である(加藤・海老原 2011)。

イナヒロハテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema inaense 写真 5

・辰野町 1050 m 2012 年 6 月 2 日
NAC163743

溪流脇に数株のイナヒロハテンナンショウが生育しているのを見つけた。他にホソバテンナンショウ、マムシグサ等が見られたが、ヒロハテンナンショウは見つからなかった。イナヒロハテンナンショウは、1 枚の葉は 5～7 枚の小葉に分裂し、葉軸は発達せず、花は筒部の白い筋は盛り上がることなどヒロハテンナンショウに良く似ている。本種は日本固有の植物で岐阜県と長野県に産し(加藤・海老原 2011)、長野県では穂高町、飯島町、駒ヶ根市に記録されていたが(長野県 2002)、昨年、塩尻市と朝日村でも見つけていた(上野・上野 2012)。

ヤマトテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema longilamium 写真 6

・塩尻市旧塩尻 1100 m 2012 年 7 月 7 日
NAC163751

他のマムシグサ類はほとんどが花は終わっていたのに、本種のみはよく咲いており、花期が遅い。個体数は多く、当地には広い範囲に生育していた。本種は舷部がヘルメット状になるヤマザトマムシグサに似ているが、舷部の幅が狭く、筒部の 1.5～2 倍と非常に長いという特徴がある。また、口辺がわずかに反曲し、付属体は細くやや前のめりになる。花期が特に遅く上記のように植物体の特徴もはっきりしていることから、他のマムシグサ類との区別は容易であるが、「長野県植物誌」(清水 1997)ではマムシグサ 1 種に統合して、他のものと区別していなかった。長野県にはカルイザワテンナンショウ *A. sinanoense* Nakai と呼ばれるものが記録されているが、ヤマトテンナンショウとは同一のものとされた(芹沢 1997、邑田 2011)。県内では芹沢(1997)は軽井沢町、辰野町での標本を記録しており、また長野県(2002)では南牧村での記録がある。

ヒトツバテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema monophyllum

・王滝村崩越 900 m 2012 年 9 月 29 日

石のゴロゴロした溪流脇にあちこちでテンナンショウが実を付けていた。すでに花は終わっていたが、葉は 1 枚で、葉軸が発達することから、ヒトツバテンナンショウと同定した。ヒトツバテンナンショウの分布は、やや東側に偏っており、木曽谷には少ないようだが(長野県 2002)、松本市から塩

尻市、朝日村、木曽町のやや明るい溪流沿いで見ている（上野・上野 2012）。

エビネ（ラン科）

Calanthe discolor 写真 7

・天龍村 400 m 2012 年 5 月 20 日

NAC163748

スギ林の斜面にエビネが一株のみで花を咲かせていた。県南部と北部にわずかに記録があるが、庭に植栽されることが多く、他県においても乱獲によって数を減らしており、野生で見えることはほとんどなくなった。

ヤマトキシソウ（ラン科）

Pogonia minor 写真 8

・松本市大野川 1500 m 2012 年 7 月 28 日

NAC163745

ミズゴケの繁茂する明るい湿地にヤマトキシソウが群落を作っていた。本種はトキシソウによく似ているが、花が上向きに咲き、唇弁が小さくほとんど開かない。本来の自生地はやや湿気味の草地であるが、ここではむしろトキシソウの好む場所に生育していた。他にはカキラン、ミズチドリが多く見られた。

ツチアケビ（ラン科）

Cyrtosia septentrionalis

・飯田市南信濃南和田 380 m 2012 年 11 月 25 日

遠山川の護岸に赤い大きな実を付けた状態となっていた。ツチアケビは県内では、南部を中心に分布しており、近くでは泰阜村で観察した（上野・上野 2012）。

コケイラン（ラン科）

Oreorchis patens

・辰野町 1100 m 2012 年 6 月 23 日

溪流脇の湿ったやや暗い場所に数株が花を咲かせていた。塩尻市、旧榑川村でも比較的湿った溪流脇で見かけた（上野・上野 2012）。その他木曽町周辺でも見かけることの多いランである。

謝辞

本報告の作成にあたり、貴重な情報と助言をいただきました長野県環境保全研究所&ハーバリウム（NAC）の大塚孝一氏には、心より感謝いたします。

引用文献

- 今井建樹・伊東昭介 (2004) 信州のスマレ。ほおずき書籍。
- 上野勝典・上野由貴枝 (2012) 新産地報告 (7)。長野県植物研究会誌 45：43-46。
- 神奈川県植物調査会 (2001) 神奈川県植物誌。神奈川県立生命の星・地球博物館。
- 加藤雅啓、海老原淳編集 (2011) 日本の固有植物。東海大学出版会。
- 高知県 (2009) 高知県植物誌。弘文印刷。
- 佐竹義輔・大井次三郎・北川四郎・亘理俊次・富成忠夫 (1982) 日本の野生植物Ⅱ 草本 離弁花。平凡社。
- 清水建美監修 (1997) 長野県植物誌。信濃毎日新聞社。
- 芹沢俊介 (1997) 長野県のテンナンショウ属。長野県植物研究会誌 30：1-15。
- 長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック。維管束植物編。
- 長野県植物誌資料集作成委員会 (2005) CD-ROM 長野県植物誌資料集（普及版）。
- 邑田仁 (2011) 日本のテンナンショウ。北隆館。